

家庭内暴力の一考察

A Speculation about Violence within the Family.

庄 司 ユリ子

はじめに

家族関係学の主要な研究対象は、現代家族の家族関係であるといえるだろう。いまや、臨床心理学・精神医学などの領域で家族関係の研究は大きく進展しているにもかかわらず、家族関係学では、それらの研究成果の導入がたち遅れている。先進の他学に通じる研究を、素地の少ない家族関係学の立場で論ずると、一方ではいらざる解説を必要とし、他方ではそれでも説明不足ということになりがちである。家族関係学は、これまで法律学的、ついで家族社会学的研究を導入してきたが、本来基礎科学に属するものではなく、複合的・応用的・実践的性格をもつ科学であるから、その進展途上では解説の過不足はやむを得ない。本論文では、「家庭内暴力」という現在のわが国の家族の在り方を考えるうえにおいて示唆するところの大きい家族病理現象をとりあげて、不可解といわれる青少年たちの心を考察することを主題として家族関係学へのアプローチを試みる。

1 家庭内暴力の現状

本論文で考察する「家庭内暴力(者)」とは、下記の岩井寛(精神医学者)¹⁾の定義に基づく。すなわち、

- (1) 家族の誰かに暴力をふるう青少年、とくに中・高生が対象である。
- (2) 家庭における両親、祖父母、兄弟など肉親に暴力をふるうが、家庭外では暴力傾向を見せない。
- (3) 脳波に異常があったり、器質的な病変があって起こってくる現象とは区別する。
- (4) 付随的に神経症傾向は存在しても神経症症状が主となることはない。
- (5) 精神分裂病その他の精神病は否定できる。

などの特徴をそなえる一群である。

これを「純型」とすると、これに登校拒否を伴う「準純型」のものを含めて考察する。この他に非行を伴う亜型もあるが純型のものは、家庭内と家庭外との間に見事な一線が引かれた家

庭内でのみ見られる暴力現象である。

これまで、人間・家族を中心においた家政学を主軸に研究してきたが、他方ユング派の教育分析を受け、臨床心理学・深層心理学の立場から個人・家族の心理相談および神経症・境界領域・精神分裂病などの心理療法を行ってきた。臨床心理学の立場をとり、精神医学の立場をとらなかった。たしかに、神経症・境界領域・精神分裂病といった名称は精神医学の領域で用いられている病名であって、これらの患者にはその病気に特有の症状があるので、それに無知では心理療法は行えない。しかし、心理療法家は白衣も着なければ、薬も用いない。相談に来られた人たちが精神科で受診してとか、入院していてつけられていた病名というのみで、心理相談では、こういったことを一度枠外において、同じ人間として相対するのである。クライエントの心の内にある葛藤について、ユング心理学による心の深層の理解をもって応答し、その人が問題を克服し成長してゆくプロセスを共にするのである。心の葛藤は個人のものであるがそのような状況は殆んど家族に深くかかわりをもっているので、「個人相談・家族相談」と言っても、「心理相談」と言っても同じ内容をもっているものと考えられることである。

ところで、現代は家族関係のあり方について、多くの問題を抱えている時代である。現代文明が転換期的様相を呈しているという世界的状況の中で、とくにわが国では急激な文化的・社会的変化に遭遇しているため、親子の関係、夫婦の関係など家族問題における病理現象が多発している。「家庭内暴力」というとき、米国では親の児童虐待、兄弟間の暴力、夫婦間の暴力、老親虐待など、さまざまな形で社会問題になっているが、わが国では、子どもによる家庭内暴力が主に社会問題になっている。ちなみに、家庭内暴力ではないが「暴力」ということで、文化圏の違う英国では、フットボールの試合で観客の青年が、狂ったように殺しあいを始めるといったようなことが、スポーツ・イベントで度々起こっているという。ライアル・ワトソン²⁾(動物行動学者)は、「こうした暴力は歴史上なかったことで、現代の若者たちの暴力は誰にも理由が見付けられない。世界中疫病のような意味のない暴力は、常識から考えると解らないが、精神医学や深層心理学から見れば、何らかの手掛かりが見付けられるのではないか」と語っている。「家庭内暴力」は、「心理相談」の立場を重んじ、深層心理学の視点からアプローチすべき課題と考えるべきではないだろうか。

わが国の「家庭内暴力」といわれる現象は、昭和40年代から目立ち始め、50年代に入り、昭和53年に家庭内で暴れる息子を父親が殺し、翌年母親が息子の後を追って自殺した開成高校生事件、翌54年に早稲田高等学院生が祖母を殺し自分も自殺した事件、続いて55年に金属バットで両親を撲殺した予備校生事件が発生して、一般の人びとにも大きなショックを与えたことからよく知られるようになった。

『昭和62年版青少年白書』による家庭内暴力の報告によると、「昭和61年に少年相談等を通じて警察が把握した家庭内暴力を行った少年の数は856人で、前年に比べ251人(22.7%)減少した。家庭内暴力を対象別にみると、母親が63.5%で最も多く、また、家庭内暴力の原因、動

家庭内暴力の一考察

機別にみると、しつけ等親の態度に反発してが55.8%と最も多い」とある。このような統計を見ると、家庭内暴力現象は減少していくかのように見える。しかし、これらの統計による数字は決して実態を捉えた数字ということとはできない。というのは、家庭内において常識では考えられないような子どもの暴力があったとしても、一般的に精神科や相談機関を訪れることを拒否する場合が多く、実態を把握することは容易にできることではないからである。親の立場としては、子どものしつけの在り方が問われることや、「良い子」が豹変して、理解不能の暴力をふるうという予想もしなかった状況の悲しさ苦しさは、容易に他人に語ることはできないであろう。筆者が扱った経験からしても、①子どもが暴力をふるい始めた初期は、親がこれを何とか内々に収めようとしている間にこじれてしまい、②外部に救いを求めずにいられなくなった頃には、暴力沙汰を起こしている本人が、これを親戚を始めとする外部に洩らさぬよう動物的感覚のような過敏さで、母親の行動を監視し拘束しており、③外部に洩らしたと知ると暴力がいつそうひどくなるということもあって、この事態を救済するにも当の子どもとの面接は難しく、母親との面接も、かなり用心された状況でのことで容易ではない。従って、隣家の人でさえ、「何かあるな」と思うことがあっても、その実状を知ることは少ないだろう。家庭内で起こっている限りの暴力は、このように他人の目には容易にふれるものではなく、それだけに家族関係の研究も深いところになると、実態把握も救済も難しいといえるだろう。

昭和63年(1988)7月8日東京・目黒区で起こった両親と祖母の3人を惨殺した中学生の事件は、家庭内暴力が最も悲惨な形で表出した事件で、改めて社会の人びとに大きなショックを与えた。多くの母親たちが「この少年の置かれた状況はどこ家庭でも多かれ少かれ、思い当たる親子の関係であり、どこ家庭でも起こりうる事件ではないかと年ごろの子を持つ親の一人として、他人ごとではないのです」(朝日新聞投書欄“声”より)と、稀な事件であっても、状況は母親たちの心に内在する子育ての不安をかきたてた。悲劇が起こった家庭と起こらないでいる家庭との間に大差がないと多くの人が感ずるならば、これは、この一家の悲劇というだけでなく、わが国の「いま」を語る病理現象といえるだろう。

ところで、8年前、両親を金属バットで撲殺した青年は、事件後3年間自分がしたことではあってもなぜそんなことをしたのか、考えたがわからないと裁判で陳述している。その青年の弁護にあたった弁護士も、動機はいま一つ解らないと語っている。この度の事件を起こした中学生も動機らしいことをいろいろ語っているが、ほんとうのところ自分の動機を説明することはできないだろう。この事件の調べに当たった捜査官も「具体的に何が彼を凶行に駆りたてたか、はっきりしない」と、その動機を絞り切れずにいるという。つまり、動機があるようにみえるが、それにしても計画までして両親と祖母を殺した中学生の心をつかみかねているのである。たまたま、当日不在で生き残った祖父は、「我が家は、こんな事件が起きるような家庭でない」と語ったそうだが、家族の一人として共に生活していても、全く不可解としか言いようのない事件であったようだ。家庭内暴力が問題とされ始めた頃には、精神医がこのような子ど

家庭内暴力の一考察

もたちを精神分裂病者と誤解したほど理解しにくいことで、青年期の反抗などという以前からあった概念では捉えることのできない、不可解な暴力現象なのである。

この事件の後、新聞、週間誌、雑誌、テレビでの情報などを集めて、両親、評論家、教育者、作家、相談機関の心理学者、精神医、そして若者たちなど、さまざまな立場の人の事件に対する見方や考え方を探ってみた。立場の違いか、人間観の違いか、実にさまざまな意見が集まった。これらを概観して、改めて問題の難解さを思った。実際に暴力をふるう子どもを抱えている母親の身の安全を案じ、子どもの心の傷を案じながら、その家族と共に悩み解決への手掛りを探ってきた立場からすると、納得できない意見もかなりあった。いまでは、「子どもが悪いのは親が悪いからだ」という単純な発想のみでは通用しない。それのみか、表面的な発想では問題をかえって根深くして、救済を難しくしてしまうことになりかねないと思われる。

家庭内暴力の動機を考えるに、当の子どもたちが家庭の外、すなわち社会と家の内の境界に一線を引いていようと、社会システム・社会環境から受けている抑圧は、大人と同じく大きい。深谷和子（児童臨床心理学者）は、目黒での事件の直後次のように語っている。「断定的なことはいえないが、本人は相当追いつめられていたと思う。中学2年といえば親から自立したい年ごろ。ところが、親は子どもの“自立の欲求”になかなか気づかず、いつまでも“大事な子”としてかかわる。3人の大人から羽交い締めにされているような息苦しさに耐えられず、ついに暴発したとも考えられる。いまの子は周囲にだけでなく、自分自身に対しても明るく振る舞う。そんな中で苦しさが募っていったのではないのでしょうか」（7月9日朝日新聞）。

いまの時代は、悩みを悩めない青少年が多くなり、老人や子どもと似てきたともいわれ、心の痛みの深まりが見えにくい状態になっている。アメリカの社会学者パーソンズは、現代の家族に残された機能は、子どもの社会化（パーソナリティの形成）と成人のパーソナリティの安定化の二つだとしている。この説は多くの人に認められてきたのだが、いまのような「時代の変革期」における家族機能は、成人のパーソナリティの変革と子どものパーソナリティの安定化をつけ加える必要があるのではないだろうか。経済的に豊かになった日本の子どもたちが、家庭で個室を与えられる状態になったにもかかわらず、「私は居場所がわからない。でも、家しか帰る場所がない」という登校拒否の中学生（7月11日朝日新聞社説“親たちを殺した少年の心”より）、「家には私の居る場所がない」と家出をした高校生・大学生も筆者のクライアントの中に何人かいた。「何が不足で……甘ったれるな」という大人も多い。しかし、筆者の扱ったケースに限って言うと、甘ったれでできる家出は一件もなかった。誰がこの子らの心を救ってやれるのだろうか。

ひとり

谷川俊太郎

ほっといてほしいのおねがいでから
めをつむるわなにもみえないように

みみをふさぐわくちもつぐむわ
でもころはなくしてしまえないから
おもいだしてしまうのつらいこと
わたしをいじめるあなたはにくくない
あなたもほかのだれかにいじめられている
そのほかのだれかもまたもっとほかのだれかに
わたしたちはみんないじめられている
めにみえないぶよぶよしたものに
おとなたちがきづかずにつくっているものに
おかあさんのなぐさめもうるさいだけ
おとうさんのはげましもうとうしいだけ
だからいまはただひとりにしておいて
ほんのすこしだけしんでほしいの
ほんとにしぬのはわるいことだから
おんがくもきかずにあおぞらもみずに
わたしひとりでもくせいまでいってくるわ³⁾

注

- 1) 岩井寛「臨床社会病理学の理論」『臨床社会病理学』岩崎学術出版社。1980, pp. 222~223。
- 2) ライアル・ワトソンは、動物行動学始め9種の学位をもち、探検家、テレビプロデューサーとしても活躍。『生命潮流』など学問領域を超えた著作でも知られている。
- 3) 谷川俊太郎詩集『はだか』筑摩書房。1988, pp. 63~65。

2 家庭内暴力に対するさまざまな見方

家庭内暴力を考察するにあたって、最初、筆者自身の扱ったケースの中の3事例を中心に
して考察する予定にしていた。しかし、東京目黒で起こった両親と祖母を殺害した中学生の事件
について、識者の提出したいろいろな見方を知るに及んで、今回は、これらの意見も参考にな
ると考えて、筆者の関心をひいた幾つかをとりあげて考察することにした。

この事件の概要は、『朝日ジャーナル』8月5日号に記載のものをあげておく。

「衝撃的中学生事件簿」より……目黒十中事件 7月8日午後2時ごろ、東京都目黒区の建材会社
役員、沢野井宏祐さん(44)方で宏裕さんと妻朝子さん(40)、宏祐さんの母フミさん(70)の3人が刃物
で刺されて殺されているのを通報で駆けつけた碑文谷署員が発見した。現場近くにいた沢野井さんの
長男(14)が「両親と祖母を殺した」と認めたため殺人容疑で緊急逮捕した。

長男の供述によると、前夜遅く、期末試験の成績が良くなかったのを両親に叱られたうえ、サッカ

一の部活動をサボったことで小言を言われた。このためカッとなり、金属バットや包丁を用意していたん寝たあと、8日未明、次つぎに3人を殺したという。刺し傷は3人とも数10カ所ずつというむごたらしきだった。

その後、①友だちに犯行を手伝わせようとした、②タレントの南野陽子を襲う計画だった、③犯行後、ヘッドホンでカセットテープを聞きながらマンガを読んでいたなどの“異常行動”が新たな衝撃を与えたが、その一方で「母は冷たかった。一度でいいから温かく抱かれたかった」とも述べ、さびしい胸のうちのぞかせている。

以下、識者の意見について、その要旨を記し、考察を試みる。

佐木隆三(作家)——「なぜ彼は両親と祖母を殺したか」——¹⁾

「これは例外中の例外で、めったに起こらない事件が起こった……」だが、事件のニュースを知り、わたしは咄嗟に、「どこか家庭で起こっても不思議はない」と感じた。わが家には、中学3年の息子が居る。「何故、こんなことが起こったのか？」自らに問いかけて、答えの出しようがない。ただ一つだけハッキリしているのは、受験戦争の悲劇ということだ。

14歳の少年にとって、両親の過大な期待がどれだけ重荷だったことか。そのことを知って、さて、わが子にどう対応しよう？ 事件後に息子に言った。「楽はさせない。今のうちに、うんと自分を鍛えろ。厳しさを知らないまま、大人になるんじゃないぞ」こういう説教が、14歳にはカチンとくるのだろう。しかし、父親が子に迎合して、どうなるというのだ。憎むなら憎むがよい、わたしは本気である。但し、今度の事件で教訓を得た。「あの子は、もう私の手に負えない。あなたから、注意してちょうだい」妻の常套句だが、今後は一切、聞く耳をもたない。もう一つ、酒を飲んで帰宅したら、ベッドに直行して温和しく寝よう。

動機の解明は、神様でもない限り不可能だと思う。少年審判は非公開だから、審理の過程を知ることとはできないが、可能な限り解明の努力をしてほしい。わたしにとって、「他人事ではない」のである。(傍点筆者)

これが、年ごろの息子をもつ父親の代表的意見であろう。これをとりあげたのは、佐木隆三が、この事件を起こした少年の行動とその周辺を、最も詳しく調べた人であったことによる。外側からの調査では、動機の解明ができないことを語っている。

成清良孝(都立新宿高等学校国語科教諭)——「高校生の親が抱える心配のタネ」——²⁾

受験期に多少ノイローゼになる子もいる。だが、これらが原因で肉親の殺害にまで及ぶのは、これは精神鑑定の対象というほかない。精神病理学の対象にしなければならないものを、いとも簡単に一般の教育問題にすりかえてしまう。純朴な人心を惑わしてばかりいるいわゆる識者のコメントを読んだ親たちは、明日にでもわが家で起こりかねない惨劇の幻想に脅えている。罪な話だ。正常な人間の論理では、この少年の言動の脈絡がたどれないのだ。とにかく高校生の言動に対処する親のあり方は絶対に強引さ避けること、これが第一であることを繰り返しておきたい。

この度の事件は、稀にしか起こらない異常な事件なのであるから、それを一般論化する必要はない……というような意見もかなりあるようだ。しかし、これが「教育の現場」からの意見であることは問題である。不安を感じた親たちは、決して、識者のコメントによるものではなく、事件そのものから感じた不安であることを、こうした教師は見えていないようである。

同じく教育の現場から、「ボクはおかあさんを殺したい」という中学生の声を集めた、望月

一宏（教育評論家）の意見があるが、³⁾「中学生たちの鬱積した悩みを理解しない限り、成績一辺倒のロボット社会への怒りは母親に向かう」ことを指摘している。筆者は、N教育大学での「家族関係」の授業で、学生にこの事件についての感想を求めた。その中に、「以前、大人のつくった管理社会の中をあっちこっちひきずりまわされている迷い子の気がしていた」、⁴⁾「僕は、それほどショックを受けなかった、僕に肉親を殺せと言われても、できるとは思わないが、近頃の日本の家族では、肉親を殺すことができる少年が存在しても不思議ではないと感じたから」、また「わたしは、父親を殺してやりたいと思ったことがある」などの声があった。たしかに、精神病理学の対象になるだろうが、それを別枠にして除外できる問題ではないといえるだろう。河合隼雄は、「カウンセラー、教育者など、他人の家族問題の解決には能力を発揮する人でも、自分の家族の問題では頭を悩ませていることもある。これは単に“紺屋の白袴”的な話題を提供するものではなく、現在における家族問題の深刻さを示しているものと思われる」と語っている。筆者が相談に与った家庭内暴力の中で、最も解決が難しいと思ったケースは、親が教師であった。教師という立場からくるプレッシャーが親に強くのしかかっており子どもの対応以前に、親のノイローゼをまず解決せねばならなかった。いまこのケースについて述べることはできないが、このケースの少年を追いつめたのは、間接的にはあるが理解の浅い「教育者」たちではないかという思いがするのである。

成清良孝は、「とにかく、この事件はあまりに衝撃的であった。では、高校生の場合はどうか」と、普通の高校生をめぐる親の心配をあげている。筆者が、一言したいのは、この事件を起こした中学生も、事件を起こす以前は、普通の中学生だったことである。

西部邁（評論家）——「なぜ少年は“人生”を見失ったのか」——⁵⁾

僕がこの少年に感ずるのは、著しい精神の「貧しさ」です。学校が嫌いになって万引をしたり、家出まがいのことをしたり、喧嘩三昧にふけったりする少年がいます。他方に、勉強して良い成績をとって有名高校に入ること、あるいはサッカーの練習をして、正選手になって女の子にもてることを最大の目標にしている少年がいます。どちらの少年が貧しいのでしょうか。ごく常識的に考えれば、一生懸命勉強したり、サッカーの練習に励むのはいいことで、万引をやったり、家出や喧嘩に走るのはいいことだということになる。しかし、僕は、勉強して良い成績をとって有名高校に入ろう、サッカーの練習をして正選手になって女の子にもてようという論理のほうに貧しいものを感じます。もちろん有名高校に入りたいと思ったり、女の子にもてたいと思ったりすること自体はごく自然な感情でしょう。しかし、それが少年時代の最大の目標になるということが奇異なのです。ここにある論理は「……して、……を手に入れ、……したい」というきわめて目的合理的なものです。それは、「家族を殺して金を奪って一緒に遊びに行こう」という論理に、よく似ているのではないのでしょうか。そして昨今の少年たちが、このような論理に閉じ込められているとすれば、それは少年の世界としてはひどく狭く、ひどく貧しい。少年時代特有の感受性はそんなところでは育たない。

この少年は著しく「怠惰」ということもできます。僕のいう「怠惰」は人が生きるとはそもそもどういうことなのか、わかろうとする努力を放棄しているということです。この少年が、学校嫌いになったことなんか大した問題じゃない。問題はその後にある。学校が嫌いになった彼が、少し想像力さえ働かせれば、学校の外には、論理の外には、豊かな世界が広がっているとわかる。学校さぼって映

画ばかり見ててもいいし、本ばかり読んでもいい。ところが彼にはそういう想像力は皆無、彼がやったのは「……をして、……を入手し、それで……をしよう」という「学校の論理」をそのまま踏襲して、その論理構造にもっとも手近な要素である祖母と両親をぶち込むということだった。学校的なるものとは別の論理を想像しようともしないという意味で、これほど怠惰なことではない。この事件で一番嫌なところは、「冷酷非情」ですらないという点にあります。やけに合理的で世俗的です。人が生きるということにかんする想像力が皆無なんです。

目黒の中学生は、本当にかわいそうな子供なんです。それは「温かく抱かれた記憶がない」からでも、「おなかが痛かったのに、お母さんがおなかをさすってくれもしなかった」からでもなく、物質的繁栄とは逆に、膨らみも余裕もどんどん削ぎ落とされて、ますます貧しくなっていく昨今の日本において、想像力も言葉も失い、人生を生きることがいかなることであるかを見失っているからなんです。高度情報化社会になり、人生のコンプレキシティを生きる術を教えるという父親の役割が今ほど重要になっている時代も少ないのに、父親の役割放棄が進んでいるんです。

戦後民主主義の空疎なスローガンの横行の挙げ句、日本は国家—歴史—神話—宗教への感受性の源を失ってしまった。つまり、父親不在、故郷不在の社会になってしまった。そのひとつの現れが目黒事件だと思われます。

今年に入って、わが国では、これまで人目につかない所で徐々に進行していたような問題が、急に顕在化した事件が多かったように思われる。われわれの関係で言うなれば、家族の問題と学校・大学の問題である。これらの問題の一つが、東京大学教養学部での中沢新一の助教教授選任人事に関する問題で、学内だけにとどまらず一つの社会問題となった。この問題における一連の経緯は、人文社会学系のアカデミズムとは何か、またこの分野における研究・教育のあり方等々の古くて新しい問題の所在を鮮明に浮かび上がらせた。この事件は、社会科学の一分野で研究・教育に携わる者の一人として、筆者も常に考えさせられていただけに関心が深かった。これも、わが国の時代状況として起こるべくして起こった事件という思いがした。この東大事件の渦中の一人が、西部邁であることは説明するまでもないことだが、大衆民主主義批判を使命とする彼も、また父親である。自分の息子の教育で、父親の役割の難しさを身をもって体験し、「校門50メートル前まで」の父親の役割を果たした自信もあっての目黒事件の意見であろう。それにしても、事件を起こした14歳の少年について、著しい「精神の貧しさ」や「怠惰」を指摘し、「人が生きるとはそもそもどういうことなのか、わかろうとする努力を放棄している」などと、まだパーソナリティ形成の過程にある少年に対して、現在の社会では、大人でも難しいと思われる課題をつきつけての批判は強弁としか言いようがない。「学校の論理」の外にある豊かな世界の一つとして、映画とか本とかがあげられているが、子どもの教育について放任していないと思う親で、それを許すことのできる親がどれほど居るだろうか。現代の子どもたちは、むしろ親の管理の目をかいくぐって、勉強の合間に本や映画に代わる漫画やテレビゲームに熱中しているのではないだろうか。大人の目には怠惰であり、現実逃避ということになるだろうが、子どもたちの追いつめられている状況を、もっと深く感じとる必要があるのではないだろうか。西部邁の強弁は、彼流のパフォーマンスで、「父親不在」と「想像力の不足」を論じたものであろうが、子どもの現実理解については不十分だと思われる。

家庭内暴力の一考察

日向野春⁶⁾総(等潤病院院長・心療内科)は、「子供の親殺しのテーマは、古いところではギリシャ神話にもあり、親の子殺しのテーマについては、グリム童話の中にその徴候を読みとることができる。神話、民話、童話の世界に親と子の心の葛藤がみられるのは、このテーマが昨日、今日にはじまった問題でなく、人類が家族をもつ社会集団をなしてから、ずっと悩んできた事柄なのかも知れない。……中学生に人生観がわかるでもなく、自分の目標すらさだかではないだろうが、しかし、彼らは、自分の将来に対して不安をいつも抱いているのである。」この事件の動機について、「親子の心の交流のずれ、人間を点数字列化する学校教育、テレビ、マンガ本での殺人シーンの氾濫による社会環境、そして、狂人説などのどれか一つを自分の考えと合致しているとして捉えてしまうのは、親としての心の混乱を合理化して事件を忘れ去ってしまうことになる。この事件のもつ意味を各々の人が、主体的に把握してくれることを望んでいる」と述べているのは、心療内科医の臨床からする見識であろう。

注

- 1) 佐木隆三『婦人公論——緊急特集親子はわかりあえるか——』中央公論社。1988, 10月号. pp. 116~125。
- 2) 成清良孝, 同上. pp. 132~137。
- 3) 望月一宏, 同上. pp. 126~131。
- 4) 河合隼雄『家族関係を考える』講談社。昭和55年. p. 186。
- 5) 西部邁『プレジデント——特集父と子——』プレジデント社。1988, 9月号. pp. 128~133。
- 6) 日向野春総『婦人公論』同上. pp. 110~115。

3 想像の世界との関連

ここでは、「親子という他人」と題された森毅(京都大学教授・数学)¹⁾の記述から、家族関係における想像力の問題に関連づけた考察を試みる。まず、森毅の考察を、要約で紹介しよう。

今のところ、現実の日本で、親は子を捨てず、子は親を捨てぬという信仰があって、その信仰がある程度実行されている。しかし、親が子を捨てるというのは、子どもの自立にかかわる。ついでに、これのデュアルとして、子どもが親を捨てるのは、親の自立にかかわる。人間の自立を考えるなら、現実²⁾は現実として、親は子を捨てるもの、子は親を捨てるものという想像力³⁾をもち、その覚悟なしでは自立は望めない。

殺人について、人間が人間を殺すというのは、たぶん相当のパワーを必要とするもので、そのようなパワーが使われる場合の二つのケースをあげると、一つは戦争の場合で、敵は自分と同じ人間と思わないことによって、相手を殺す。この両者の距離が無限に遠くなることで殺人が可能になる。もう一つのケースは、二者の距離が無限に近くなった場合として、親子とか夫婦という関係がある。この距離の無さが、相手を他人として認めることがむずかしく、逆説的なことになるが、心を許しあえる関係が却って殺人を可能にするというように考えられるのである。日本で「心中」と美化されている親子心中、夫婦心中なども、自殺願望があれば自分ひとりでやればよいのであって、親を殺したあとで自殺した子どもがいたが、それも子どもの側からの親子心中であると言ってよい。古来、想像のな

かでの、「親殺し」や「子殺し」が語られてきた。それはたぶん、「親捨て」や「子捨て」を過激にしたものだろう。それが想像力のなかで、象徴として存在することは、むしろ健全なことだ。想像のなかで殺人をおかしていれば、現実の世界で殺人をしないですむ。現実の距離と、想像の距離を対抗させることが必要なので、現実と想像が一元化するときに殺人さえ誘発する。ここで、親子関係というものを、ことさらに抽象的人間関係一般として議論している。遺伝子の維持などにこだわらずに、人間関係一般に解消することの方が有効と思うからである。だから血縁幻想を完全に排除して議論を進めている。そしてこれも、現実の関係を抽象するという、想像力によっていることなのである。

べつに親子関係にかぎらないのだが、今ほど想像力が必要な時代はないのに、その想像力が衰弱しているような気がする。想像力が必要ということは、それだけ時代の現実が迫っていることでもあって、のんきに想像力を使う以前に、その現実まきこまれてしまうのである。でもそんな時代だからなおさら、想像と現実を一元化しないようにする必要がありそうに思う。

以上が、森毅が述べるところであるが、われわれは、人間のこの想像力を巧く働かせることによって、人間関係を調整もし、また、現代文明を築きあげてきたのであるから、想像力を高く評価することにおいて、誰も異論はないであろう。しかし、森毅もいうように想像力を使う以前に、その現実まきこまれてしまっている現代的状況がある。筆者も家族相談の場で、「こんなふうに考えてみてはどうですか」と言ってみることがある。しかし、そのように心の機能が働かない状況の人に対して、後々の展開における布石としての意味はあるが、即座の役に立たない場合が多い。心の問題は、意識的に解決できない深い領域にかかわっていることがあるため、無意識の領域にふみ込まねば解決できない事態が多く出現している。それにしても、想像力を育てることは、教育上の問題として見逃がせない重要な課題といえるだろう。

ところで、われわれは、常識的に「想像力」という言葉を日常使っているが、この場合カント的（構想力＝想像力）というより、サルトル的な意味で、「想像力」という言葉を使っているように思われる。サルトルの想像力論は、現象学の立場に立ったもので、その要点は、①イマージュはそれ自身志向性をもった意識である。②知覚が分解的に把握するのに対して、イマージュは対象を全体的にとらえる。③想像的意識は対象を空無化する意識である。④想像的意識はイマージュを生み出し保存する自発性²⁾をもっている。このようなイマージュの働きの中で、対象を全体的にとらえようとする点は、意識の働きというだけのものではなく心全体の働きにかかわりをもつことにおいて重要である。サルトルの実存において、想像力は、「意識の自由で自発的な空無化の作用」として「自由の問題」へ発展してゆき、その自由は、「それ自身志向性をもった意識」として、逃避ではなく、「参加すること」に結実してゆくのである。

サルトルは、人を知る上において、その幼児期を知る必要を強調している。このことは誰に教えられたというものではなく、サルトル自身が、自らの生の体験において得た認識であった。サルトルの子ども時代の体験がいまの日本の子どもを知る上で示唆する内容が豊かだと考え、ここにそれをとりあげてみる。

ボーヴォワールの回想録によると、サルトルは29歳の時、かなり強度のノイローゼに悩まされている。サルトル自身は、自叙伝『言葉』を書くことによって、9歳の頃から50歳の年に至るまで、自分がまぎれもない神経症にかかって生きていたことを確認している。自分の狂気や

強迫神経症の源泉を探ぐり、それは幼児体験に根ざしていることを明らかにしている。サルトルは、「私が世界に出会ったのは本の中においてだった」と語っている。「生まれながらのプラトン主義者である私は、知識から出発してその対象物へ向って行った。私は、物におけるよりも、観念の中により多くの実在性を見出していた。なぜなら、まず最初に観念が与えられ、しかも物として与えられたからである。……世界はそこで同化され、分類され、ラベルを貼られ、思念され、さらに恐ろしいものになっていた。私は、自分の読書経験の無秩序と、現実の出来事の無謀な流れとを混同してしまった。ふりほどくの30年もかかったあの観念論は、そこに由来する。」³⁾

このようにサルトルは、先に紹介した森毅のいう「現実と想像が一元化された」生き方をしていたといつてよい人である。サルトルは、自身の実存的³⁾精神分析でもって、自己の家族歴、生育歴などを『言葉』の中で語っている。父方・母方の祖父母のこと、父親・母親の過ごした家庭環境、その育てられ方、そして、サルトル自身生後1年余りで父を亡くし、3・4歳の頃父方の祖父母の家で暮らすことになる。この祖父の書齋が幼いサルトルの世界になった。サルトルは「田舎で過ごした少年時代の錯綜した思い出や、懐しい無軌道ぶりを私の中に探しても無駄である。私は決して土をほじくりかえしたり、鳥の巣を探し歩いたりはしなかったし、植物採集や、鳥に石を投げたこともなかった。しかし、本が私の鳥であり、巣であり、家畜であり、牛小屋であり、私の田園だった。蔵書は、鏡の中にとらえられた世界だった。誰かが私に靴をはかせたり、鼻に薬をさしたり、髪にブラシをかけたり、体を洗ったり、服を着せたり脱がせたり、着飾らせたり、愛撫するのを、私はおとなしく許しておく。良い子になっている遊びほど面白いものを私は知らない。」しかし、一人っ子であったサルトルは、良い子であった他方で、「みんなから溺愛され、ひとりひとりからはねつけられていた私は、仲間はずれにされた存在だった。7歳のとき、私は自分以外に頼る者を持たなかったが、この自分はまだ存在していなかったのである。」「架空の子どもであった私は、想像力によって自分を防禦した。6歳から9歳までの間の私の生活を振り返ってみると、私は自分がずっと心霊修業をつづけていたことに驚く。」「父無し子としての私は、高慢と惨めさで一杯の、自己原因であった。」

サルトルは、自己の存在確認として、「惨めな少年」は「英雄」になる必要を思い「事を待ち望んでいるだけでは英雄にはなれないし、それを揮う相手がなければ勇氣も才能も充分にあるとはいい難い。退治されるべき海蛇や竜が必要となる。だがそんなものはどこにもみかけなかった。」「私は、本の中で、ものを書こうと考えていたに違いない。他方では祖父から——これは事実じゃなかったが——ものを書くべしと命じられたと思こんでいた。」結局、サルトルは、書くことによって「英雄」になろうとした。

サルトルに、新たなことが生じたのは11歳のとき、母が再婚し、全く違った家庭環境の中に置かれたときである。義父は、立派な人物で申し分ない人だったが、理科系の技術者で、サルトルをほとんど理解しないまま、勉強を教えることでトラブルを起こしている。「意識事実と

言えるもののなかで、母と義父との関係について直接いやな思いをしたことはなかったが、それでも母との縁を切ってしまった」というサルトルの家庭の外観は、ごく普通の家庭に見えたに違いないが、このときの生活をさしてサルトルは「複雑な家族関係だった」と語っている。

サルトルは、まだ字が読めなかった頃のあるとき、「折たたみベッドに腰かけて読む真似をした。一行もとばさずに黒い線を目で辿り、全音節を発音するように気を配りながら、ひとつの物語を大きな声で自分に話してきかせた。皆は私を見つけて——つまり、私が見つけさせたのだが——感歎の叫びをあげ、アルファベットを私に教える時がきたと判断した。」

幼い頃からサルトルは、「良い子」を演技する子どもであった。そして「読書は、私にとって、子どものときから非常に大きな役割を果たした。私の逃げ場はこれだった。言葉、つまり本だった。」「読書がなにかしら現実の中心のようなものとなっていた。残りのことは付帯現象というか……そう、幻覚のようにすこし見えていた。こういうものには、あまり大きな現実性を認めなかった。なぜってその世界ではわたしは不幸だったんだから。」

以上のようなサルトルの子ども時代をみると、その生きた時代背景が異なるにしても、いまの日本の子どもたちについて語られるものに共通する内容が多いことに気付かされるのである。それは、父親不在、周りの大人に溺愛されながら孤独な一人っ子、自然の現実体験がほとんど無く、現実感が稀薄で外界での不幸から容易に虚構の世界に逃げこもうとする状況、期待に対する過剰な感じ方、そして演技もできる「良い子」であることなどが共通しているといえるだろう。

サルトルは、本・言葉を用いて想像の世界で遊んでいたが、いまの日本の子どもたちは、テレビゲームや漫画本の映像の世界に熱中している。両者の違いは外観上の差異で子どもの心の状態からすれば、イメージの世界に逃避しているのであって本質的な差異は無いように思われる。

サルトルは、現実の世界で長い間神経症をひきずって生きるはめとなり、虚構の世界をふり払うのに30年を要したという。そして、この幼児体験を語ることができたのは、自叙伝を書くに至った年齢（1905年生れで、自叙伝の主要な部分は1953年に書かれている）まで待たねばならなかった。このことを考えると、親を殺した子どもたちが、自分の行動を語ったとしても、自分の心について語るができないでいるのも不思議ではないと思われるのである。

注

- 1) 森毅『婦人公論』1988, 10月号. pp 104~109.
- 2) 『哲学事典』平凡社. 昭和46年. p 474.
- 3) サルトル全集第29巻『言葉』人文書院. 昭和39年. pp 35~36.

4 感覚・神話の世界との関連

目黒の「中学生の殺人事件」を考えたいいくつかの見解の中で、最も注目すべきものは藤原新也¹⁾の一文（7月19日、朝日新聞）である。藤原新也は、『東京漂流』や『乳の海』などの著書で、崩壊する家庭の親子のあり方を迫真的に描いた写真家であり、作家である。藤原は、「もし、写真家としての私に、80年代の日本を一発ワンショットで撮れ、という乱暴な注文が与えられたとするなら、迷わずに一柳展也が両親の額めがけて振り降ろした、あの金属バットを撮る²⁾」といている。藤原は、撮影のかなわぬ「金属バット」から「家」へ視線を移して、'81年10月2日、不動産屋広告的写真手法にのっとって「金属バット両親撲殺事件の家」を撮影している。そして、この写真について藤原は、次のように語っている。

その写真を見て誰かが「何だ、これは、不動産屋の写真と同じじゃないか！」と言った。その誰かは、「惨劇の家」を写すからにはその家が血の匂いのする、異様なものとして写し撮られることを期待していたのだ。私の撮った“建築写真”を“不動産屋写真”と言ってさげすんだ時、半ば、その写真は十分に成功したといえる。

「不動産屋の写真と同じじゃないか」という言葉の背後には、何だ、これは、日本のどこにでもある、という思惑が読み取れる。さらに言えば、何だ、これは、私の常日頃見慣れた私の街の私の家や、その周辺の家と何ら変わらないじゃないか、という意味に収斂できるはずだ。私は、その意味に収斂させていくために、あのような不動産屋広告的写真手法にのっとって“一柳家”を提出したのである。

つまり、藤原は、「一柳家の悲劇」はいまの日本の家族の悲劇として、どこで起こっても不思議ではない事件であること、それ故にこの悲劇をわれわれの問題として受けとめる必要のあることを写真で表現したのであろう。この写真を見たとき、それが不動産屋の広告風写真であるにしても、大変印象に残ったことがあった。その家は、階下も二階も今様の緑色のビニール板の雨戸がたてられていて、内部の生活を窺い知ることはできないが、庭の縁側の所にあった二足のつかかけは、どちらもきちんと揃えて脱がれてあった。それは、ここを出入りした人たちのしつけの良さ、行動面での落ちつきを物語っていて、このような家で、両親を殺すという惨劇が起こったということはとても思えない印象のものだった。

藤原は、その後この「家」の行方を追って「'82年5月23日 家屋取り壊し さら地になる²⁾」、「'82年9月26日 夏草 生い茂る²⁾」の写真を撮っている。そして、それから2年後の、'84年10月14日に撮影した写真について、次のように解説している。

かつていくたびかわたしの前で変幻した、そのニッポンの点景は、再び四たび、忽然と変幻し、そこに新生家族、新案住宅の出現を見せつけていたのだ。

カ・ワ・ユ・イ ハウスがそこにあった。いや在るとも思えないような実在感の希薄なハリウッド映画のセットのようなハウスがそこに建ちはじめていたのである。

あのニッポンの家の匂いを最後に引きずりとどめていた金属バットの家から、一転し、突如とんがり屋根の二つ、真っ青な空に突き出した元気で空虚で無国籍で非歴史的なメルヘン・ハウスの出現

は、20世紀末の計報の土地に居住し続けなければならない「それからの日本人」の精神様式と身の処し方を象徴的に物語っていた。

「家」は偽装しはじめたのだ。「家」は演技しはじめたのだ。あるいは疑似精神分裂を自ら選びとって、現実からの防衛機制としての「明るいビョーキ」を身に纏いはじめたのだ。それはまた思考停止ハウスであり、^{無原則}ダダの家であり、または^{あきらめ}脱構築の製図によって引かれた、明るい空虚に自足する偽装建築であると言える。

'80年に起こった一柳家の悲劇は、当時、人びとに大きなショックを与えた事件であったが、そのショックもほんの僅かな時の流れの中で風化していった感がする。事件後の4年目には、故郷喪失風の家が建てられ、何事もなかったように別の家族が移り住み、生活を続けてゆくであろう様子を、藤原新也は見事にカメラに収めたわけである。あのメルヘン・ハウスの説明を読んでいる間に、それは、「ハウス」の説明ではなく、このたびの悲劇を演じた中学2年の「少年」の外観であり、^{仮面}ペルソナなのではないかと思った。そういえば、あの少年は明るい性格だったという記事もあった（『週間朝日』7月22日号）。

「少年」は、偽装しはじめ、演技をはじめた。疑似精神分裂を自らが選びとって現実からの防衛機制としての「明るいビョーキ」を身に纏いはじめている。それは、^{無原則}思考停止少年であり、^{あきらめ}ダダ少年であり、または、^{あきらめ}脱構築の人生設計をして、明るい空虚に自足する少年であったと説明することもできるのである。

このように、「物」と同時にその背後にあるものを読みとる鋭い「感」を持つ藤原新也の「中学生殺人を考える」の下記の一文こそ、不可解といわれた少年の行動の真相を、最もよく説明しているものではないだろうか。

ある機会があって、藤原は、テレビゲームの脅威的なベストセラー「ドラゴンクエスト」を知る。

青少年たちを夢中にさせた物語を、簡略に説明すると、そこには昨今の管理化された現実が無いものが用意されていた。

冒険。試行錯誤。戦闘。迷路。目的に至るまでのさまざまなプロセス。○×式でない無数の答え。旅。ロマン。ヒロイズム等々。そこには定型的に短縮効率化された現代のシステム教育、システム社会が切り捨ててきた時間と空間が、まるで原初の地球のように広がっている。少年は定型化され、現実のにおいの失せた現実^に背を向け、TV画面の中の、より現実らしい^に虚構の中に脱出し、身体を遊ばし、息を吹きかえす。

目黒の中学生による家族殺害事件の報道に接したとき、まず脳裏に浮かんだのが、なぜか「ドラゴンクエスト」の画面だった。殺人は一種類の凶器によってなされるのが通例であるのに、数種類の凶器を用意するというのは特異な例である。犯罪に何の経験も持たない中学2年の少年が、あたかも戦い慣れたコマンドのごとく、金属バット、包丁、電気コードと、少なくとも三種類の凶器を用意した。この少年の奇妙な行為は——「ドラゴンクエスト」の中で主人公（ヒーロー）である「私」は目的地に向けての長い旅の出発のとき、百種類もの武器の中から任意にコンボウ、クサリガマ、銅のツルギ、など数種の武器を選んで身につけることになっている——ひょっとしたら凶器調達の発想を、あの虚構遊戯の中に得たのではないか。しかも、少年はテレビゲームに熱中していて親に止められていたという。このことは、今回の事件の中でかなり重要な位置を占めるかも知れない。そして、少年はその殺害プランを遂行するために三人の友人に声をかけて誘っている。「ドラゴンクエストⅢ」で

は、主人公の「私」は三人の友人を戦闘の旅の道連れにするのだ。ひょっとすると少年は、このテレビゲームのシステムとまったく同じスタイルで現実を捕捉しようとしたのではないか？ そうだとすれば、少年の手にしたものは「凶器」ではなく「武器」ではないのか？

少年は、ある少女タレントを獲得するため祖母と両親の殺害を企て、そして事件の後、その少女タレントのビデオを見ている。このTVブラウン管の中の少女の虚像は、欠落した母親像を投影する身代わりではないか。

藤原新也の上記解説を要約すると、英雄としての少年は、武器をいくつか用意して、3人の友を誘い、これは失敗したが、「ママゴン」という怪物を退治する戦に出かけたのだ。その戦が終わった後、少年は心のうちにある永遠の女性と対面するという物語りを実現したのだらうというのである。

このように改めて説明しても、一般の人には何のことを語ろうとしているのか、その意味は解らないだらうから、それは、テレビゲームの悪影響による少年の行動なのだらうという思いがするのではないだらうか。しかし、この少年の表現したものは、異常な例外的なことという以上に、われわれの生存の根源、あるいは、文化の根底にかかわる深い意味をもった出来事であるといえるのである。

エーリヒ・ノイマンは、『深層心理学と新しい倫理』のなかで、次のように述べている。⁴⁾

個人の自我や意識の発達、英雄の生や行為の場合にみられる原型的な出来事を再現する過程である。悪の行為も、英雄という存在の、それゆえまたすべての個人の人格発達過程の根本葛藤の中に含まれている。「世界両親の分離」や「原両親殺し」は、英雄の所業や悪業を意味すると同時に、自我にとって不可欠の自己解放行為を示す重要な象徴である。

個々の人格がそれぞれの時代の文化規範のうちに包含され、誰もがその文化価値を適正なものとするのできる健全な文化を保っている時代には、人間の深層にある情動的な生命力も十分に表現の手立てをもっている。宗教や芸術、祭儀や風習などが多くの象徴で満ちているので、必ずしも「偉大な個人」でなくとも、個人はその時代の文化の中で健全で活気に充ちた生を営むことができる。

しかし、一つの文化規範の崩壊に直面する変革の時代にあっては、個人はこのような保護された状態から転落し、原初的な力や、生または死を司る神々の掌中に陥る。換言すれば、個人は現実の生の中でいかなる因習の後循によっても守られることなしに、じかに危険と対面しなければならない。

ノイマンは、神話に登場する英雄の行為のうちに、個体の心理的発達過程のモデルを見出し、この個体発生に先立つ意識の系統発生過程を詳細に研究した人である。個人の心の深層のドラマと、神話上の「神々のドラマ」とが酷似していることの発見をして以来、精神分析学とか民族学の分野で研究されていた神話や民話・昔話などが、近年、深層心理学や文化人類学の領域で、一層重要な研究内容になってきていることも、生存の根源あるいは文化の根底にかかわっていることにおいて、必然的な展開であったといえるだらう。

両親を殺した少年の悲劇的な自己解放行為は、一つの文化規範の崩壊に直面した変革の時代におけるスケープゴートとして、神話の世界の英雄、象徴としての英雄を、現実の世界で演じてしまったようである。

藤原新也は、この事件についての考察の最後を次のように締め括っていた。「少年の経験値や目的が現実ではなく、TV画面を通したシミュレーションや虚構を礎としてやしなわれている。シミュレーション世代においては虚構の側からの現実の浸食がはじまっているのだ。つけ加えるならテレビゲーム画面の私（主人公）は死んでも何度も生きかえることになっている。ひょっとしたら少年は自殺の意味を知らないでいるのかもしれない。」

注

- 1) 藤原新也『東京漂流』1983。『浮の海』1986。情報センター出版局。
- 2) 『東京漂流』p 309。写真はpp 312～313, pp 314～315。
- 3) 『乳の海』pp 342～343。
- 4) エーリッヒ・ノイマン (1905～1960) は、終生ユング派の深層心理学研究グループ「エラノス会議」の主要メンバー。『深層心理学と新しい倫理』人文書院。1987。pp 118～119。
- 5) E・ノイマン、林道義訳『意識の起源史』上・下、紀伊国屋書店。1984, 1985。

5 家庭内暴力を考えるに必要な「心の問題」について

「家庭内暴力」がなぜ起こったか、その動機を考察するに際して、その家族の家族歴、家族構成員の個々の特徴、そして、家族員間の力動関係などの追求が必要となる。それと暴力をふるうに至った子どもの生育歴、つまりパーソナリティの形成過程とパーソナリティそのものの追求も必要である。これらに関する研究は、現在までに多く発表されてきている。しかし、これらの研究でもいま一つ解らないと疑問の残るのが、暴力をふるう子どもの心の状態についてであった。暴力をふるった子どもが、ことの重大さをどこかで意識しているようだが、その本質的なところでは自分でも解らないでいる。このあたりの解明ができないことにはスケープゴートの子どもを救うことはできない。家庭内暴力について「常識では考えられない」とか、「これまでの概念では捉えられない」といわれているからには、その考察にあたって、これまでの既成概念を越えるものが要求されるだろう。これまでの心理学は実験と観察の経験的な事実確認という方法を自然科学と共有してきた。この心理学に対してユングは、「人のこころについて知ろうとする者が、およそ実験心理学から学ぶところは何もないだろう。あってもごく僅かだろう」と言っているが、心理療法家の立場からすると、人の心の機能は数量化し得ない生きた現実として直接体験の「臨床の知」を重視する。心理的現実についての研究は、このように二つの相互に対立する考え方があるのだが、それは相互に排除されるものではなく補完するものとする。ただ、近代科学の枠付けを前提とする研究においては、心理生活の現実を理

解するに至らない。そこで必要になってきたのが臨床心理学である。現在はすでにこの分野での研究も進み、それに基づく心理療法が開発されてきているが、需要に供給が追いつかない、つまり、対応が遅れているという現状があるといえるだろう。

心理相談に応じてみると、心の問題も軽い（浅い）ものから重い（深い）もの、具体的にいうと日常生活的悩みから人間の存在の根源にかかわる悩み、精神病理学的にいうと神経症から境界領域、そして精神分裂病というように重くなっていく。いずれにしても人間の心の意識面だけでなく、心そのもの、心の全体構造を考慮し、無意識の領域についても理解を深めなければ問題の解決に有効な心理学とはならないだろう。厳密にいうなれば無意識的な心的内容といっても、それが言語表現されるかぎりそれは意識されているので無意識ではない。普通無意識の心的内容といっているものは、それが何とかして意識化されたものを指しているのだから、それは、意識的内容に比して意識されにくく、心理臨床家や精神分析家の援助を得たり、本人の格別の努力によってはじめて意識されることなのである。

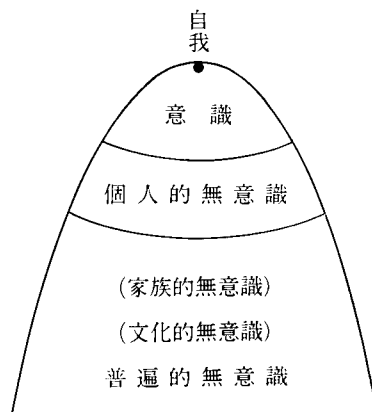
ユングは、無意識の層を個人的無意識と普遍的無意識の二つに分けて説明している。同じ無意識を扱う立場にフロイト（派）があるが、ユング（派）の立場は、普遍的無意識の層に関連することから、フロイト（派）の精神分析よりは、心の深層を扱っているといえるだろう。

井筒俊彦（イスラーム学者）が紹介している¹⁾、イスラーム文化内に発達した神秘主義、スーフィズムの考えによる意識構造では、西洋の心理学においてきわめて大切な自我は偽りの自我に過ぎず、このような偽りの自我が消え去ると、何もない無になってしまうが、その無こそ本当の充実であり、その無そのものが、そのまま自覚となり覚体

と化して実現され、そこに真の主体としての真我が自覚されることになる。そして、心の深層を無意識というのでなく、あくまで次元の異なった意識として把握しようとするのである。つまり、深層心理のごく深いところの意識を次元の異なる意識と捉えているのだが、この次元の異なる意識は自我意識の延長では考えることができないことを示している点に注目したい。

家庭内暴力を起こした子どもについて、その現象が扱われた初期において、精神医たちが精神分裂病と誤認したということから、一つの示唆を得ることができる。家庭内暴力は心の問題として大変深い次元にかかわっているという推測ができるのである。自我が確立する以前の子どもの意識は、追い込まれるという状況も手伝って、先に説明したスーフィズムの意識構造でいう次元の異なった領域にかかわることが多く、たやすく自覚できる状態ではないが、大人た

心の構造



ちが見失ってしまった心の根ともいえる魂をあらわに、夢とか神話の世界を生きるような一面があるのではないだろうか。ユング心理学では、心の深層の無意識を知るために、夢とか昔話や神話の研究を欠くことのできない内容としてもっているのも理由のあることなのである。夢と想像の中で、神話の世界を生きるならば、それは健全ですらある。ところが、過保護下にある子どもは、不満に対する耐性が弱いこともあって、何かのきっかけから、夢や想像の中で表現される神話的な感情が意識の中に紛れ込み、現実と現実の影の世界とを一つの世界で生きてしまうのではないだろうか。

説明が短絡的過ぎるが、簡単な事例をあげてみよう。長年神経症的症状に苦しみ、胃潰瘍で入院したこともあるマザー・コンプレックスを自覚していたある男性が、「母親のいる実家に尋ねてゆき、そこで母親が作ってくれた御馳走が盛られてあった食卓をひっくり返し、母親をソロバンでぶちのめす暴力をふるった」という夢を見た。やがてその男性は、保護されるだけの母親の愛情を拒否し、神経症をのりこえられた。また、夢の中で母親を殺してしまった子どもが、その夢を見たことによって家庭内暴力が収まったという例もある。無意識の内界での対決は、現実生活の外界での対決に通ずる心理現象であることを、夢分析ではよく体験することなのである。

子どもたちの問題行動を、われわれ大人が以前のままの尺度で裁こうとするかぎり、問題の対策は生まれてこないだろう。わが国では、現在かつてないほど急速に物質的に豊かな社会となり、豊かな家庭生活を営むことができるようになった。これは、科学技術の発達と共に、たぐいまれな機能優位の社会を実現させたことによる豊かさであった。しかし、効率と管理を徹底させた生活水準の上昇が、われわれにとって真の幸福につながる豊かさであったかと問われる状況になっている。

本村汎は、現代の日本において、積極的な意味合いで「良い家族関係²⁾」とされるのは「その家族関係が、すべての家族成員の自己実現を保証している場合である」とする。自己実現、生きがい、あるいは生活の質的充実などは、およそ効率の考えに従わない現象である。人間の生存や、人間の活動には、「意味」という重要な要素が加わってくる。自己実現の問題や家族問題の相談に応ずる仕事をしていると、特に「意味」の問題がクローズアップされてくるのである。

家庭内暴力といわれる家族関係における暴力も、それぞれのケースによって「抗議としての家庭内暴力」、「自立の試みとしての家庭内暴力」、「操作の手段としての家庭内暴力」、「共生関係の再構築の試みとしての家庭内暴力³⁾」など、その意味するものは一様でなく、暴力をふるっている子どもが、何を表現しようとしているかはさまざまである。

現在、社会と環境の変化はその規模と速度を急激に増大させ、人類は生態学的にも、社会的にも、人間関係の上でもかって経験したことのないほどの変化に直面させられている。家庭の中でもこれまで何世代にもわたって作りあげた文化やしきたりも、様相を変えてきた。自然

の中で息づいた過去の子どもたちが体験した生活はかぎられたものとなってしまった。子どもたちは、TVゲームやマンガなど映像の中に、現実の世界で求め難い冒険・ロマン・ヒロイズムなど、心を充足させるものをみつけて熱中する。それはあくまで物語りであって現実の世界とは違うものだ、わけ知り顔の大人が子どもに言っても、子どもの心の奥には届かない。子どもが無意識の力にのみ込まれてしまう行動に対して、われわれは、どのように対処せねばならぬか常に問われている時代である。家族を惨殺するに至った子どもたちは、いきなり事件を起こしてしまうというようなことは決してない。この度の家族を惨殺した少年にしても、近所の50代の男性の話によると、「一ヶ月ほど前の夜中、あの家で大喧嘩があった。“バカヤロー!”と大きな声で何度もね。親子のどっちが怒鳴ったか分からないけど。そんなことが最近だけでも3回ありました。で、4回目がかんなことになっちゃって……」と、惨劇の徴候は出ていたのである。筆者が心理相談において、最近とくに感ずることの一つに、何かで挫折感をもったときの子どもの心理的落ちこみが大変深いということがあげられる。いまの子どもたちは「死を実感できなくなっているのではないか。だからこそ、理解不可能な自殺や殺人があるのだ」という人も多い。しかし、筆者の臨床体験からすると、子どもたちは、生存の根源にふれるような「死」を過敏に感じており、その意味が解らないための「不安」をもてあましているように思われるのである。家庭内暴力を起こした子どもたちは殆んど「死んでしまいたい」とか、「殺してやりたい」とかいう言葉を使っているようである。生きることの不安が大きいからであろうが、それを子どもは意識してはいない。

目黒の中学2年の少年は、事件を起こした後、「母は冷たかった。一度でいいから温かく抱かれたかった」と言っているのに対して、西部邁は、その言葉に「寂しい胸のうちを見たりするのは、センチメンタルにすぎる。今時の子供はこのくらい芝居がかった台詞は誰でも言いますよ」と語っている。筆者の推測では、普通にいう母親の温かさなら、この少年も得ていたと思う。しかし、ここで少年の語る言葉は、もっと次元の深い意味をもっていたと思うのである。それは、自らの存在にまつわる不安を癒やすに必要な「魂を救う者への呼びかけ」である。暴力をふるう子どもの暴力についてはよく知られていることだが、この子たちが他面で母親が訝るほどの甘え方で母親を求めてくることはあまり知られていない。小学生位なら可能な行為だが、体も大きくなってくる中学生ともなると母親の方が受け付けなくなるようだ。しかし、この甘え現象は普通に言われる甘えとは違って、存在の不安からくる母親との一体化現象なのである。サルトルが語っているように、「みんなから溺愛され、ひとりひとりからはねつけられていた私」のような、孤独な一人っ子が、やがて、森毅が説明しているような、子どもの側からの無意識的な親子心中を起こしてしまい、少年は無意識的であったため、その後の身の処置ができぬまま、わが身を社会へ預けたもののようなものである。

小此木啓吾(精神医学者)は、子どもが孤独であるのに孤独を感じない状態の「テレビゲーム依存症」について、「夢中になる、人と遊ばなくなる、自分本位になる、人と離れる」などの

特徴をあげている⁴⁾。また、青木保（文化人類学者）は、「おそらく日本人は、自分が孤独であることに気づかない本当に孤独な人たちなのではないか、とよく思うようになった。外見的には、世界における日本人の態度に孤独の影はない。大挙して外国へおしかけ、思う通りに振る舞って、さっと引き上げてゆく。残すのは騒音だけで、そこに人間がいたという痕跡すらなくらいだ。……外観にもかわらず、いま日本人の内部に広がりつつあるのは、深い虚無の闇であり、世界の中の、集団の中の、どうしようもない孤立感なのではないだろうか。この闇と孤独をしっかりと直視できるようになってはじめて、真の国際的な日本人が生まれるのではないかと思う⁵⁾。」と語っている。日本の大人も、子どもも「闇と孤独」を深いところで共有しているのではないだろうか。

さて、家庭内暴力の子どもの問題は、そのまま親たちの問題であり、事件の直接の被害者は親たちであっても、その子どももまた時代の悲しい犠牲者である。エーリッヒ・ノイマンは、「今日のような時に、個性性こそ共同体の中心問題であると考えた心理学は、一見時代から見捨てられた立場に立つと思われるかも知れない。しかし、つねに見捨てられた立場こそ、人類にとって決定的な出来事が起こる地点なのである⁶⁾」と述べている。

一人の人間の自己実現の挫折が意味をもつのは、それが超克され新たな成長に結びつくときである。家族の問題も、同様トラブルの対決を通してよき関係に組替えられたとき意味をもつであろう。「子どもは危険信号を必ず出しているのに、それが分らないのは周囲の大人が鈍感なだけ」（日向野春絵）、とならないよう、家族関係学の研究・教育でも時代に応じた在り方を導入してゆかねばならない。

注

- 1) 井筒俊彦「イスラーム哲学の原点——神秘主義的主体性のコギト——」上・下『思想』No. 662, 664. 岩波書店。1979年8月, 10月。
- 2) 本村汎「良い家族関係のための条件」『家庭科教育』58巻1号, 家政教育社。1984。
- 3) 若林慎一郎・本城秀次『家庭内暴力』金剛出版。1987. pp 74~80。
- 4) 小此木啓吾。NHK教育テレビ, 市民大学「ゆらぐ心の絆」第5回, 1988年6月。
- 5) 青木保「孤独な日本人」朝日新聞。1988年10月7日。
- 6) E・ノイマン『深層心理学と新しい倫理』はしがき末節。

あ と が き

「家庭内暴力」は表に出にくい家族問題であるだけに、その実態はつかみにくい。子どもの発する危険信号を最も早くキャッチするのは母親であるが、その母親もまた家族も、その対応策を知らぬまま、手遅れ状態となり事件にならぬまでも悲劇的に苦しみを続ける家族も多いのである。

家庭内暴力の一考察

心理療法家や精神科医で、家庭内暴力を扱っている人は多いのだが、それを詳しく事例で発表できる人は極めて少ない。それは家庭内暴力の対処の難しさに通ずるものでもある。家族関係学の領域では、臨床体験をもつ研究者が少ないため、家族関係の本質にふれる部分は、空白に近いような状態である。いずれ稿を改めて、事例報告をしたい。

(1988年10月)